

ある＃といわれたのをいいことにして、地学の講義に名を借りて、楽しくお話を、思いつくままに1時間半シャベリ続けることにしている。天下の才媛には、少し歯ごたえがないと思うが、感ずるところあって、その主義を押し通している。

私は去年、お茶の水女子大学に顔を出してから、貝山久子さんや吉見則子さんと一緒に、日本の大都市における気温・湿度の極めて特徴ある変化について調査し学会でも発表し、今年中には学会誌に掲載されることになっている。

元来、近代都市は、拡張されるに伴って、その気温は年々高くなり、湿度は年々低減する傾向のあることが、かなり以前（19世紀末頃）から指摘され続けられている。日本でも、東京とか大阪のような大都市では、年と共に気温が暖かくなり、また湿度が乾いてきていることは、市民にも実感として受けとめられている。冬になっても、スモッグがたちこめるために、身をきるような寒さになることは少なくなってきた。また化繊の下着類をぬぐ時などは、パチパチと放電するほど、空気が乾くこともまれではなくなっている。このように、都市に気候異変がおこるのには、(1) 都市の膨脹によって大気汚染が増大することと、(2) 道路や建築物のコンクリート化、池や川にふたがされたり、追放されたりすることが、原因になっていると考えられている。

私たちは、東京や大阪のような日本の大都市の気温と湿度を、実測資料にもとずいて調べてみた。そうすると、戦前と戦後については、都市の気温は年々上昇しつづけ、湿度は年々下降しつづけていることが、明瞭に指摘できた。ところが、戦時中（昭和16年～昭和20年）だけは、判然と気温は逆に下降し、湿度は逆に増加していることが認められたのである。

過ぐる大東亜戦争中は、日本では産業活動が低下し、都市の疎開がおこなわれた。このため日本の空はキレイになり、隅田川のような都市河川もかなり澄んできた。このために大都市の気温は逆に下降したのであろう。また都市は荒廃したままに放置されていたので、湿度も逆に増大して行ったのである。

大東亜戦争は、まったく日本にとって悪夢であった。その戦争の爪跡が、こんな自然現象の上にまで、蔭をおとしていたのである。こんなことを、お茶の水女子大学地理学教室の皆さんと協力して実証したことを、せめてもの慰めとしている。

（東海大学理学部教授）

## 渡 辺 先 生 と 私

土 井 喜 久 一

渡辺先生には学問的にも個人的にも、非常に恩をうけたものでありながら、御退官記念の論文集には、原稿も間に合わず、大変申し訳なく思っておりましたが、「お茶の水地理」から機会を与えられ、その恩

について少しでも述べることを感謝いたします。

先生の御業績については、著作目録や他の多くの方の筆と言葉とで明らかで、改めて申し上げるまでもありませんが、私が特に感服しているのは真の総合的地理学者として地形学の画期的な諸研究から始まり、その研究は地域特性、地理的意義という地誌の核心にまで発展されたこと、また一方、文部省・国土地理院・大学学部の学術行政の実践にも美事な成果を得られたことであります。地理学は総合的な科学であると言いながら専門分野に没頭している地理学者が大多数という実情の中で、渡辺先生は飛び抜けて総合的な学者であります。これは地理学の本務である地誌への深い関心と、その現れとしての多数の地理大系・地理全集の編集と総論執筆などから実ったものでありましようが、また政治・歴史・経済などに対する天分的な洞察力の賜でもありましよう。

私が個人的に受けた恩義としては、陸軍気象部の少尉として応召中、士官学校の教官を兼務して秋岡渡辺・岡山・小川など諸先輩の中に加えられ、地理学界から放れぬようにして下さったこと、また愛知県教育文化研究所から現在の静岡大学教育学部に移るよう御推薦をいただいたこと、河出書房の日本地理新大系「中部」の執筆を激励して下さい、曲りなりにも完成にこぎつけられたこと、その他数えきれぬほどであります。

こうして陰に陽に御指導御鞭達をいただきながら、一向にまとまった研究もできず深く反省しておりますが、最近興味をもってやっていることを少し述べて近況報告に代えようと思います。それは最近盛んになっている数量的地理学の中に属するでしょうが、必らずしも複雑な関係式や龐大なコンピュータ計算に重点をおくものではなく、むしろ算術計算を主とします。数量化することによって地域を分析する視点をはっきりさせ、また逆に数量的方法によって地域を規定しようとすることに重点を置く仕事です。

具体的な例をとれば従来も人口重心、人口正中点などの研究は多くありましたが、その地理的意味づけは充分でなく、単に人口分布の一表現法にすぎませんでした。しかし、人口ポテンシャルの点では地価・行政区域の広さ、所得などとの密接な関係が示され、地理的意味付けに成功したものと言えますが、それでも計算が龐大という難点がありました。ところが人口正中点を再検討して見ると、これはその点から地域内の各地点へ人口に比例する量の貨物を発送し、あるいは地域内各地から人口に比例して代表者が集まるときの輸送距離の総和の最小の地点であるという意義づけができます。

ところが九州について、距離を直線距離でなく、鉄道・道路などの現実の輸送網で計って輸送距離の総和の最小点を出して見ると、久留米市のやや南（鉄道では瀬高町）となり、いわゆる九州の中心の福岡市又は北九州市とは一致しません。このことは現実の九州の中心地が、九州だけの地域中心として成立したのでなく、本州との交通関係の影響や、大都市圏の一部としての山口県西半の影響にもよることを示唆します。（北海道については、現実の中心札幌と輸送距離総和最小点岩見沢とはほとんど一致するといえる。）以上は所与の地域について理論的中心点を求めて検討した例ですが、逆に中心地を定め

てこれに対する人口100万人圏などを検討することもできます。合併によって、市町村が統計単位地域としての意義を甚だ低下させた現状こそ地理学が主体的に地域を再吟味すべきときであり、その手段としても、数量的方法を発達させねばならぬと思います。（静岡大学教育学部助教授）

## 奈 良 だ よ り

武 久 義 彦

貴教室と直接関係のない私のところに、「お茶の水地理」の近況欄に何か書くようにとの御連絡がありました。どうしたものかとまよってはみたものの、相手がお茶の水女子大のことでもあり、極めて名誉ななとと考へ、一筆させていただくことに致しました。

直接関係ないとはいふものの、私が貴教室と全く縁もゆかりもないという訳ではありません。国土地理院在職中には、渡辺先生や式先生のもとで仕事をする事が出来ましたし、地理課にはお茶大出の俊鋭が何人もおられました。また夏休みなどの短期間にせよ、多くの、今は卒業生となった方々が仕事を手伝って下さっていたものです。そのようなことから学外者としては貴教室に顔を出す機会が割合多かったと思います。渡辺先生や式先生がお茶の水に移られたときは羨望の眼差しでお送りしたことを憶えておりますが、その私が奈良の女子大に移るとは、やっと気が付きました。私が御依頼を受けたのは、貴教室卒業生の熱望のためではなく、いわば姉妹校に在るためであると。

さて、奈良にきて三年経ちました。明治村行きの候補になり得るほどクラシックな木造の校舎の一角に陣取っています。はるばる奈良まで来たからには、何かやらねばなりません。先ず、重点的に取りあげたいと考えたのは、地理調査における写真地理学の方法です。理由は二、三あります。

第一に、この分野に関する講義、実習がその重要性に比べ著しく少い事情にあったこと、第二に、私自身が空中写真をみながら地理院で育ってきたこと、第三に、写真地理学の分野は女性にとって好都合な分野の一つであろうということです。大学を出て、職につき、また家庭に入るとなると、地理の研究を続けようと思ってもなかなかまとまった時間はとれないし、野外に出掛けるのは容易ではなくなるでしょう。その点、或る時点の或る地域を机上にいつでも再現してくれる空中写真のあることは何ともありがたいことではありませんか。時間をみつめて、こつこつ研究をまとめて行くのもいいでしょうし、またときには、想い出のフィールドの空中写真をながめてフラストレーションの解消に役立てることだって出来るかも…………。

ともあれ、奈良女でも三年目にしてデルフトの実体鏡とツェイスのダブルプロジェクター（図化機）がやっと入る運びとなりました。従来も反射式の実体鏡は、学生一人に一台の割で整備しておりました